「ウサギ」にまつわる日中諺の対照比較考察

王　雪・浮田三郎

1. はじめに

ことわざは、昔から人々によって言い伝えられてきた鋭い風刺や教訓、生活の知恵や一般的な真理を短くあらわした言葉である。言語表現の上から、その言語を使用する民族集団の文化的特色を見て取ることができる。日常生活から生まれ、民衆の知恵の結晶として使われてきたことわざは、各民族それぞれの伝統的な物の見方と考え方を様々に反映している。元来、ことわざは民衆の知恵の総合とも言うべきものであることから、異なった民族のことわざでも、形式から内容まで共通性をもっているものもあるが、各民族の歴史、地理環境、生産活動および人々の生活習慣、思考の方式などに差異があるため、各民族の自然観、世間観、人生観などの面にその民族固有の特性、文化の特色が見られ、諺にそれが反映されている。

2. 考察対象と方法

日本も中国も十二支という民間の習慣がある。ウサギは我々にとって身近でイメージがかわいい動物である。今年(2011 年)はウサギ年であり、ウサギという動物に焦点を当て、日本と中国におけるウサギの使用されている諺を考察対象に対照比較を行ってみようと思う。両国国民は諺にあらわれているウサギに対するイメージの同異を比較してみる。諺に現われているウサギについての表現に両国国民のどんな考え方が含まれているだろうか。

そこで、本稿では、主として日本の「ウサギ」に関することわざをもとに、それと対応する中国の諺を取り上げて対照比較するが、中国のことわざの中は漢民族のことわざを、また特に、両国でも一般の民衆たちによく知られ、生活の中でよく使われている諺を取り上げる。同時に、中国と日本それぞれの独自のことわざも考察の対象とする。

日本語の諺の用例は『故事・俗信ことわざ大辞典』（尚学図書編集、1981）を資料に、兎に関する諺を取り出す。『故事・俗信大辞典』は専門事典としてこれまでにみられない規模のものとなっている。一方、中国語の諺は、温端政などが編集した『中国谚语大全』（2004）を中心に、諺の用例を取り出した。この辞典は、約十万項目の諺を集録している。中国の現代諺辞書において、諺の数で最も規模の大きい諺辞典である。また、中国から伝わってきて、出典のある「ウサギ」にまつわる諺は 10 句ある。そして、日本本土の「ウサギ」に関する諺は 17 句あり、すべて「J」という符号をつける。それに対し、中国の「ウサギ」に関する諺は 14 句ある。ただ、前に挙げられた出典のある諺もプラスしたら、24 句あるとみられる。

考察方法として、「中国起源のウサギにまつわる諺」、「ウサギの身体特徴から生まれた両国の諺」、「ウサギの生活習性と性格からみた両国の諺」、「ウサギの行動の特徴から作り出された両国の諺」、「教訓のある童話や寓言から出た両国の諺」、「ほかに特徴的な比喩表現の両国の諺」という六つの面に分け、諺の対照比較考察を行ってみようと思う。

3. 中国起源のウサギにまつわる諺

中国文化の影響で、中国の諺が日本に伝わってきて、すっかり日本に融けこみ、日本の諺として人々に認識されているのである。歴史的に、文化交流が行われていたことを物語っている。次の表で、中国から日本に伝わってきた中国起源のウサギにまつわる諺をまと

めてみる。

番号	中国語の諺	日本語の諺	諺の意味	出典
1	「兔死狐悲」	「鼃（おおすっぽん）鳴而鼇応，兔死則狐悲」	同類が死ぬのは、自分にも同じ運命が近づいたしるしであるところから、同類の不幸をその縁者が悲しむことのたとえ。	田芸蘅『玉笑零音』
2	「見兔顧犬」	「兎を見て犬を呼ぶ」	失敗はすぐに改めれば遅くない、ということ。また、挽回のチャンスはまだ残されている、ということ。兎が逃げるのを見てから犬を放っても遅くない、ということから。	『战国策·楚策四』
3	「見兔放鷹」	「兎を見て鷹を放つ」	「兎を見つけてから鷹を放って捕らえようとする意から」１、手遅れだと思ってもあきらめてはいけない、また、ことを見極めてから対策を立てても遅くない、の意のたとえ。 2、事態が差し迫ってから慌てて行動に移ること、また、急いだ結果し損ずることのたとえにいう。１を転用したもの。	宋·释普济『五灯会元』
4	「狡兔三窟」	「狡兎三窟（こうとさんくつ）」	兎は逃げる時に逃げ道を沢山用意しておく事から、危機があっても身を守るのがうまいことのたとえ。	『韓非子』
5	「守株待兔」	株を守りて兎を待つ	古いやり方、習慣にこだわって、進歩がなく融通のきかないことの例え。「株を守る」ともいう。	『韓非子』
6	「得兔忘蹄」	兎を得て蹄（わな）を忘る	兎を罠で捕ま得たのに、罠のお陰で捕まえられたことは忘れてしまうその事から目的を果たしてしまうと手段にしていたものが不用になり忘れる。道具には用が無くなる例え。	『荘子』
7	「兔未死而狗先煮」	「狡兎死して走狗煮らる」	利用価値がある間は使われるが、なくなると捨てられてしまうこと。	『史記、淮陰侯伝』
8	「静若処子，动若脱兔」	「始めは処女の如く後は脱兎の如し」	初めは弱々しく見せかけ、後になって力強さを発揮すること。始めは処女のように弱々しくみせて敵を油断させ、最後には逃げ出す兎のように機敏に行動して、敵が防ごうにも間に合わないようにする、ということから。	『孫子』
9	「亀毛兔角」	「亀毛兎角（きもうとかく）」	「亀に毛は無く、兎に角は無い」ことから、ありえないことのたとえ。	晋·干宝《搜神记》
10	「逐鹿者不見山」	「鹿を逐う者は兎を顧みず」	大きな利益を狙う者は小さい利益には目もくれないこと。	『淮南子』

以上まとめた諺では、意味も形も全く同じである。出典は中国の本にある。一番古い諺「见兔顾犬」（中）「兎を見て犬を呼ぶ」（日）は戦国時代から残されてきた。諺の歴史と日中文化交流の長さが語られている。

4. ウサギの身体特徴から生まれた両国の諺

また、ウサギの身体特徴といえば、もっとも顕著なのは毛が柔らかく細く、耳が長く、足が短く、走りが速いことである。それぞれの特徴について、日本と中国の諺にはどういうような表現があるか見てみよう。

4.1. 日中で内容的に対応している諺

J1「ウサギの股引」
C1「兔子尾巴长不了」（ウサギのシッポが長くならない）

J2「兎の耳」
C2「包打听 」（絶対聞き出す）

J3「兎の毛で突いたほど」
C3「细如牛毛」（牛の毛のように細い）

4.2. 対応のない日本の諺と中国の諺

J4「寒の兎か白鷺か」
J5「兎の角論」
J6「兎の糞」
C4「兔子靠腿狼靠牙，各有各的谋生法」
C5「媒人的嘴，兔子的腿」

J1 と C１の表現は、何をしても長続きしないことを表している。ただ、表現的には、日本では、ウサギの足が短いこと、中国では、シッポが長くならないことが喩えられている。同じくウサギの身体部位が「短い」という表現でも、日本人にとって、足が短いことのほうがはっきりと映されているが、中国人にとって、シッポが短いことがよほど頭の中に映された印象が深いのであろう。そして、J2 では、人の知らない事件や噂などをよく聞き出してくることを表している。しかし、中国の諺では、C2 の諺を使い、直接的に噂などを聞きだすことを表す。また、兎の毛から、J3 で兎の柔らかい細い毛で突いた程度にほんの少しということを比喩している。それに対応する中国の諺では、「兎」を使わず、「牛」を使っている。なぜなら、牧畜民族の中国では、牛が農業生産で欠かせない動物であり、昔の人々の日常農家生活と密接な関係にあったと思われる。C3 の比喩表現は、ほんの少しという意味を表している。また、兎の毛は細いだけでなく、白いことから、J4 という諺も作り出されている。それは、冬は兎の毛が白くなることから、真っ白な物の例えである。ウサギは毛が白いが、しかし、中国では、それに対応する諺が見当たらない。それから、J5、J6 という諺では、「角」という体の一部分が兎の身にないことから、根拠のないことについてくだらない議論をするという意味である。「糞」は兎の排泄物としても、昔の日本人に繊細に感じられ、そのコロコロしている糞が繋がっていないことから、長続きしないことを表している。一方、中国では、C4 では、兎は足を使い、狼は牙を使い、それぞれ自分なりに生きていく方法があるという。C5 では、仲人の口、兎の足と並べて、兎は早足で自分を食べる獣から早く逃げられる術を持っていることから、世間で生活して

いる人々も誰でも自分なりに人生を生きていく方法を持っていると諭している。

以上、兎の身体特徴からの様々な諺表現で、まず両国の諺では、兎の身にある具体的な部位が挙げられ、日本の諺には兎の身体部位が多く挙げられ、中国の諺より細かく分類されいていることが分かった。それに対し、中国の諺では、兎の足という身体特徴を捉えて、人間の生活手段と関連付けて、現実的にこの世を生き抜く生き方が述べられており、生活していくためには、さまざまな手段が要るといっている。

5. ウサギの生活習性と性格からみた両国の諺

J7「兎の子生まれっぱなし」

J8「兎も七日なぶれば噛み付く」

C6「兔子急了也咬人」

C7「狡兔三窟」

C8「兔子不吃窝边草」（ウサギは自分の巣のそばにある草を食べない）

C9「兔子转山坡，转来转去还得回老窝」（兎は山を走り回ったりするが、いくら走り回っても、自分の巣に戻る）

兎の生活習性と性格からいうと、例えば、兎は子育てをほとんどしないということから、日本では、J7 の諺表現が生み出されている。ウサギが子育てさえしないことから、ほかに自分のしたことの後始末を全くしないことの喩えであり、人間の無責任のことを述べている。そして、兎は普段はおとなしいイメージがあるが、怒り出すと、やはり大変なことになるといっている。そこで、J8 では、おとなしい兎でさえ七日間いじめれば噛み付くところから、どんなにおとなしい人でも何度も辱めを受ければ怒り出すことが喩えられている。その日本の諺と対応している中国の諺は C6 である。即ち、おとなしい兎でも焦りすぎると、人を噛むだろうといっている。日本の J8 と全く同じ意味を持つ諺である。ただ、両国の表現としては、日本のほうは七日間という日数でウサギの我慢強い能力を表現するのに対し、中国のほうはおとなしいウサギをいらいらさせると、人間を噛むことがあると表現している。

また、中国では、C7 のように、「兎はずる賢く、巣も三つ持っていて、敵から追われた時に、そのどれかに逃げ込んで身を助けること」から、身を守る用意をいつもしておくようにと教えている。そして、C8 では、ウサギは巣のまわりの草を食べないことから、悪人も隣人には悪いことをしないことが喩えられている。また、C9 のような諺表現もある。以上の三つの諺に「巣」が三回も現われている。兎の「巣」といっても、人間の「環境や家」などに喩えられることが多い。中国人にとって、家の観念が強く、動物の身から人間の身に転換し、動物と人間との共通点を諺の中から発見することができる。

以上、ウサギの生活習慣において、日本の諺では、ウサギの「子育て」に注目し、人間の無責任さが諭されている。中国語の諺では、ウサギの「巣」に言及することが多く、中国人の「家」に対するイメージがはっきりと映されている。また、ウサギの性格に関して、両国ともにウサギの「おとなしい性格」でも、怒り出すと大変なことになると述べている。ここでの両国の諺にはウサギに対するイメージの相通じるところが反映されている。

6. ウサギの行動特徴から作り出された両国の諺

J9「兎の上り坂」

J10「脱兎の如し」

J11「始めは処女の如く後は脱兎の如し」

C10「心里塞着个兔子」（心の中に兎が隠されている）

兎の行動特徴からいえば、最も顕著なのは足が速いことである。このスピードの速さも諺の中に見られる。例えば、J9 では、兎は坂を登るのが速いそのことから、物事が良い条件で順調に進むことの例えをいっている。J10 では、逃げる兎の足の速いように、速い事の例えを述べている。J11 では、始めは弱く見せかけ、後に兎のごとくすばやく行動し、始め弱くよそおい油断させ、後に別人のように力を発揮することを表している。この諺は中国からの出典である。日本に伝わってきても、まだ意味が変わっていない。また、中国では落ち着かない人の様子を表す諺として、C10 がある。すなわち、胸がどきどきする様子のことである。心の中に兎が隠れていたら、兎がよく動いて、落ち着かない様子から、人の心も兎が跳ねているようにどきどきしている。

両国で、兎の敏捷と動きの速いことによる異なる諺表現が作り出されている。見る立場の違うことが反映されている。

7. 教訓のある童話や寓言から出た両国の諺

先ほど諺の出典という立場で分析してみたが、今回は諺の意味によって、諺で人々に教える教訓などが含まれているものがある。

J12「兎の昼寝」

J13「犬兎の争い」

J14「兎死すれば狐之を悲しむ」

C11「兔死狐悲」

このような教訓のある寓話には、ふだん人々がよく間違いを犯す状況が述べられているが、諺に示された意味が分かった以上、もう二度と同じ過ちを起こさないように注意している。また、J12 という諺では、兎と亀の競争の時に、亀を馬鹿にして昼寝をしたために負けた童話から、油断をして思わぬ失敗を招くことが述べられている。また、昼寝ばかりする人のこともいう。そのほかに、J13 もある。それは、両者が争って弱り、第三者に利益をとられることを諭している。犬が兎を追いかけ、山を上ったりしているうちにどちらも疲れて死んだのを、 農夫が自分のものにしたという寓話から来ている。また、J14 と C11 の諺のように、同類の不幸をその縁者が悲しむ例えもある。同類の死は自分にも同じ運命が近づくしるしだということをいっている。

8. ほかに特徴的な比喩表現の両国の諺

ほかに、日本の「兎」に関する諺では、次のような諺があるが、日本の諺に対応する中国の諺と比較しながら、諺の意味を見てみよう。

J15「兎、波を走る」

J16「兎の逆立ち」

J17「兎に祭文」

J18「二兎を追う者は一兎を得ず」

J19「年劫の兎」

J20「鹿を逐う者は兎を顧みず」

C12「跑兔没抓住，卧兔也跑了」

C13「兔子若要效狮子跳山溪，一定落个坠深涧而亡」

C14「没有黄鼠狼的地方，兔子也摆架子」（鼬のないところでも、兎も威張る）

たとえば、J15 という諺では、波が白く輝いている様が、あたかも兎が波の上を走っているように見えたことから、月影が、水面に映っているさまを喩えていう。また、兎は馬や象に比べて水に入らないので、仏教において浅い段階にとどまっていることも表す。

また、J16 は、兎が逆立ちすると長い耳が地面に擦れて痛いことから「耳が痛い」、「嫌味に聞こえてつらい」という意味になる。それと対応する中国語の諺はないが、中国語では直接に「耳を刺すようなことを言って、つらい」といっている。そして、J17 は、兎に神仏の御利益を説いても意味が分からず無駄なことであり、理解しないものにどんなありがたい教えを説いても無駄なことの例えである。「馬の耳に念仏」、「犬に論語」と同じ意味である。兎と祭文とは全然かかわりを持っていない二つの事柄から、相手にいくら話しても無駄なことだけしたということが諭されている。それと同じ意味を持っている中国の諺は「牛に琴を弾く」がある。また、「兎の罠に狐がかかる」から見られるように、思いがけない幸運に巡り合うことをいっている。それと対応する中国の諺は「天上掉馅饼」がある。いわゆる「天から落ちてきた餡入れのグレープ」という意味で、不可能に近い幸運が降りてくるということを表している。ほかに人間のやり方によって、失敗ばかりに陥っていることを述べている諺もある。たとえば、「株を守りて兎を待つ」昔のやり方にこだわって、前に進まない、融通のきかないことの例えである。

J18 では、二匹の兎を同時に追った結果一匹も捕まらないことをいっている。同時に二つの事を得ようとするとどちらも成し遂げられないという例え、戒めである。中国の諺でも、同じような諺がある。それは C12 の「跑兔没抓住，卧兔也跑了」といい、意味としては、寝た兎を取らず、走った兎を取るということであり、簡単なことをするのをやめて、逆に面倒なことをするたとえである。

また、人間はある行動に出るべきかどうかということについても、次のような諺がある。たとえば、C13 では、ウサギはライオンのまねをして、谷川をジャンプすれば、きっと深い谷に落ちて死亡するということから、実力のない者が実力のある者のまねをして、自分にふさわしくないことをしてはいけないということを戒めている。ほかに、月日の過ぎるのが早いことの例えとして、日本では、「烏兎怱怱」という諺がある。中国では、昔の神話物語で、太陽の中に「烏」が住んでおり、月の中に「兎」が住んでいる。「烏兎」とは月日のことを指して、時間に喩えられている。そして、「兎」という漢字も「免」の漢字の形が似ていることから、免職になったことの隠語として使われており、「兎の字」という諺も出てきた。

ところで、J19 の「年劫の兎」では、歳を取った悪賢い兎のこと、一筋縄では行かない人のことの例えが述べられている。しかし、中国では、そういうような人のことは「老狐狸」と呼ばれている。すなわち、年劫の狐という表現になる。それぞれ日本人と中国人にとって、悪賢いイメージのある動物が異なる。

そして、J20 では、大きな利益を狙う者は小さい利益には目もくれないことをいっている。猟師が売るのに金額の高い鹿を狙っていて安い兎には目もくれないことからきている。それも３節の表で述べたように、中国から伝わってきた多くの諺が現在日本の諺として使われている。日本と中国は違う国民でありながら、同じような発想や考えを持っているときもある。また、中国では、C14 の諺に述べられるように、勢力のある者がいなかったら、弱い者も威張るようになるということが見られる。

比喩的な意味を持つ両国の諺には、それぞれ兎を比喩素材に、異なる立場から、世間の事柄や教訓などが託されている。異なる国民が異なる発想で異なる諺の表現を作り出している。

9. 考察結果

以上のように、両国の兎に関する諺について、「中国起源のウサギにまつわる諺」、「ウサギの身体特徴から生まれた両国の諺」、「ウサギの生活習性と性格からみた両国の諺」、

「ウサギの行動の特徴から作り出された両国の諺」、「教訓のある童話や寓言から出た両国の諺」、「ほかに特徴的な比喩表現の両国の諺」という六つの視点から対照比較考察を行ってみた。

「中国起源のウサギにまつわる諺」という節では、兎は日中両国の国民にとって馴染み深い動物である。長い歴史の流れの中で、日本は中国からいろいろな領域で深く影響されている。諺においても、今回で調べてきた兎の諺には多くが中国から伝わってきており、現在日本の諺として使われているものがあることがわかった。日中文化交流が時間と空間の隔たりを超えて、両国の友情の長さと深さが語られている。

「ウサギの身体特徴から生まれた両国の諺」という節では、日本の諺で、兎の股、兎の耳、兎の毛、兎の糞などを素材に、中国の諺で、兎の尻尾、兎の足などを素材に、さまざまな表現で兎の顕著な身体特徴を利用した比喩表現が使用されている。

「ウサギの生活習性と性格からみた両国の諺」という節では、両国とも似たような諺表現があることから、動物の性格に対して、人類が共通している感覚を読み取ることができるだろう。また、日本では、子育てをしない兎の生活習性から、無責任な人間の姿につながっている。中国では、兎がいくつかの巣を持っていることから、人間の狡猾さが語られている。また、兎がどんなに山を走り回っても、結局家に戻る動物であることから、中国では家族が大事であるという観念が重視され、一家団欒の象徴とする家のことを大切にすることを意味している。

「ウサギの行動特徴から作り出された両国の諺」という節では、兎の行動特徴として、動きの速い動物であると人々に認識されているのに、異なる両国の諺表現が見られる。同じ行動特徴に対して、それを見る人の立場や態度によって、異なる発想も出てくることがわかった。それは、日本の人々と中国の人々との発想の違いなのであろう。

「教訓のある童話や寓言から出た両国の諺」という節では、童話や寓言を利用し、諺に隠されている教訓や経験などが語られている。童話や寓言などはもともと人々に何かを教えるために作られたものである。動物が人々たちに与える印象を素材に、作り話で人々に特に子供に大人がいままで体得した経験や教訓などを教える。動物たちが起こした過ちに人間も犯しやすい過ちが託されており、間違いを二度と起こさないように注意している。それは日本と中国も共通しているところである。

「ほかに特徴的な比喩表現の両国の諺」という節では、さまざまな諺の比喩表現で、日本の諺とそれに対応する中国の諺を例に、または、中国の諺とそれに対応する日本の諺を例にしながら、考察してみた。両国の文化背景によって、それぞれ異なる比喩的な意味を持つ諺が見られる。金子（1983：336）は「特殊という面に目を向ければ、素質・風土・生活・歴史などをそれぞれ異にする各国民の生んだ諺に、それぞれ特殊な国民性が見られることも当然であるし、普遍という面に目を向ければ、共通の人間性が見られることももとより当然である」と述べているように、諺から人間の特殊性と共通性が見られる。

今回の考察と分析により、中日両国の伝統文化、生活環境、生活習慣が日中両国間で「ウサギ」に関わる諺表現に対しても微妙な影響をもたらしているということが分かった。このように、諺の対照比較研究という形で異文化理解を推し進めることも本研究の意義の一つである。

参考文献

浮田三郎（1988）「日本語と現代ギリシア語（方言）の諺対照比較研究（2）」―素材「女」の見られる諺を中心に―（日本語教育と異文化理解のために）『広島大学教育学部紀要』第 2 部 第 37 号 pp. 301 - 309

浮田三郎（1990）「日本語とギリシア語の諺対照比較研究（4）」―諺の中に使用される素材「動物」（1）―（日本語教育と異文化理解のために）『広島大学教育学部紀要』第 2 部 第 38 号 pp. 287 - 293
奥津文夫著　（2000）『日英ことわざ比較文化』大修館
温 端政著　高橋均・高橋由利子編訳（1991）『諺のはなし』光生館
温 端政　主编（2004）　『中国谚语大全』上海辞书出版社
金子武雄（1983）『日本のことわざ』（全 4 巻）、（一）評釈、（二）続評釈、（三）評論（1983）、（四）概説・講説（1983）　海燕書房
尚学図書編　（1981）　『故事・俗信諺大辞典』小学館
高橋秀治著（1997）『動植物ことわざ辞典』東京堂